

# 児童生活詩の提唱に関する一考察

——稲村氏の「詩を生活へ」の提言をめぐって——

弥 吉 菅 一

## 一、稲村氏と生活詩教育

北原白秋の児童自由詩を否定し、「詩を生活へだ」と絶叫的な提言をなし、続いて『生活への児童詩教育』という著書までも出版したのが、島根の青年教師稲村謙一氏であったということは、いずれの児童詩教育研究家によっても指摘されるところで、もはや、この学界での定説であるといつてよからう。

だが、その提言の「詩を生活へ」であっても、それをふまえて書きあげた彼の著者『生活への児童詩教育』(『厚生閣書店』(昭和八年一月刊)であつても、日本が太平洋戦争に突入した昭和十六年、「生活綴方事件」というものに連座して特高警察の調べをうけることとなり、それらに關する一切の資料は、特高にとりあげられる、という悲運にさらされていたのである。が、さいわいなことに稲村氏自身は検挙されずにすんだとのこと。けれども、持ち去られた資料は未だにかえされていないとのことであつた。「関係資料のいっさいを持つていないのです」と、ポツリポツリと物語る彼の姿はさびしうであつた。これは、戦いが終つてから、さる大会が京都で開催されたとき、嵯

峨野を歩きながら本人から筆者が直接に聞いたことである。

以上のような悲運にさらされていたためか、かれのその論文と著書とは、日本の児童詩教育史のなかで、生活詩への最初の提言として、きわめて革新的で画期的なメリットを持つものであると讃えられるながらも、学的には十二分に探究されないまままで今日に及んでいる、というのが実状というものではあるまいか。

ところが、最近、『北方教育』全三卷(宣文堂書店)や、『村山俊太郎著作集』全三卷(百合出版社)など、次々に複製という形態で出版されてきた。そういう事實は、日本の児童詩教育研究のため、まことに慶賀にたえないことである。が、それらの見事な複製本などをみると、稲村謙一氏の提言「詩を生活へ」や、その著『生活への児童詩教育』などが思い出されてならない。かれの児童詩教育上の業績は、生活詩という視点からだけでなく、きわめて大いなるものがあると思われる。資料でさえ、この複製流行の時代にあつてなお、入手できないという状態のままで放置されているということは、前の二者に対しても、なんだか片手落ちのような気がしてならない。よつて、ここに

稲村氏の生活詩に関する提言のエッセイや、その著書とをここに採りあげ、そのメリットを分析し考察してみようとするものである。

さて、本稿は、そのテーマを「生活詩の提唱に関する一考察」としたが、このテーマで誰しも想起して下さる人物といえ、まごうかたなく稲村謙一氏であろうし、その提唱といえ、まず第一に「詩を生活へ」のエッセイをあげるであろう。そして、当然、その理論と実践の結晶である『生活への児童詩教育』をあげることは動かない事実といえる。よって私は、なんらのためらいもなく、このテーマで、稲村謙一氏の業績を考察の対象にとりあげる。ところで、その業績といえ、次のように二つに分けてみるのが妥当であろう。一は、『綴方生活』(小砂正忠編輯 昭和四年創刊)に所載された「詩を生活へ」のエッセイであり、他は、その翌々年に出版された『生活への児童詩教育』(厚生閣書店 昭和八年一月刊)であらねばならぬ。本稿は、その二つの内で、ひとまず、第一の「詩を生活へ」の提言のみをとりあげ考察を進めていくことにする。

## 二、提言「詩を生活へ」にまつわる問題点

稲村氏の提言「詩を生活へ」を、ここでとりあげる理由として、次の二つのことがあげられる。第一はそれが持つメリットの件である。思うに、この提言が、日本児童詩教育史の上で、きわめて重要な役割を果しているということは、もはや、いうまでもないことである。だが、その重要性の内質を、いまいっそう明確化し具体化することが、今日では要請されつつあるということに気づいたからである。もう一つの理由は、わたくし個人の誤認の件である。その誤

認の内容をあきらかにし、お記と訂正とをなすべきだと思うようになったからでもある。いま少し、具体的にいうと、稲村氏の昭和六年になしたほんものの提言と、その発表の時期とを、まったくあやまつてうけとめ公表してしまっていたということである。その重大なミスを拙著『日本の児童詩の歴史的展望』(少年写真新聞社 昭和四〇年五月刊)でお記しており、しかも約十年間も気づかずになっていたので、この誌をかりてお記し訂正をもなさねばならぬと自責の念に迫りこまれたからである。

まず、誤認のところを次に掲げる。さきの拙著『日本の児童詩の歴史的展望』の第七章「児童生活詩初期の時代」のなかで、

「このような意図と性格をもつ『綴方生活』のなから、ついにすばらしい提唱がうまれた。一九三一年(昭・六)のことだった。その一月号に、稲村謙一による『詩を生活へ』の絶叫的エッセイが所収されたのは。かれはその中で、白秋の風景写生詩と訣別しなければならぬことを強調し、『詩を生活へ!』と叫んだ。」(少年写真新聞社 昭和四〇年五月刊)

と、わたくしは述べている。が、傍点のところに注意してもらいたい。「一月号」とかいているが、実は、これがあやまりで、『綴方生活』の昭和六年二月号が正しいのである。さらに「詩を生活へ!」の引用文であるが、わたくしは稲村氏の「詩を生活へ」の提言から、これを引用したのであるけれども、それは「児童生活の理論と実践」(青銅社 昭和二八年)に所収されているものによったもので、昭和六年二月号所載のほんものの提言から引用したものではなかった。ほんものの提言のなかには「詩を生活へ!」のコトバはないのである。(それに近いコトバはあるが、正確にいつてその通りのコ

トバはないのである。だから、そのことをここに摘出し、さらに「一月号」を「二月号」と訂正し、お託を申しあげる次第である。

どうして、以上のような誤認が生まれたのか。その問題にまつわることをここであきらかにしておく。わたくしのこの拙著における引用文は、次のような事情のもとに成立した「詩を生活へ」の文から抽出したものであった。一九五三年のことである。青銅社から『日本児童生活詩読本』全六巻が出版されているが、そのおり、別巻として、『児童生活詩の理論と実践』という書が同出版社から刊行されている。その内容は、

#### 第一部 児童生活詩小史

#### 第二部 児童生活詩の理論と実践

#### 第三部 戦後の児童生活詩

という三部だてになっている。その第二部に、当時の青年作文教師、稲村謙一・入江道夫・妹尾輝雄・角虎夫・吉田瑞穂・近藤益雄・野口茂夫・小川隆太郎・鈴木道太・国分一太郎・村山俊太郎・寒川道夫、以上十二人の論文が所収されている。その最初に、稲村謙一氏の「詩を生活へ」というエッセイが所載されているのである。そのなかに、

「ぼくたちの詩教育がたどるべき道は何であったか。

詩を生活へ！だ。

児童生活詩の新建設へだ。

ぼくたちはここにまことの、そして新しい詩教育の道を見出すのだ。」(傍点筆者)

とある。わたくしはその中の「詩を生活へ！だ。」を引用したのである。さらにそのエッセイの最後には、出典として『綴方生活』昭和

六年一月号所載」とあったので、それを信じて、採用したのである。当時、わたくしは、ほんものの『綴方生活』誌を所持していなかったで、この青銅社刊の『児童生活詩の理論と実践』所収の「詩を生活へ」というエッセイによらざるを得なかった。そして、わたくしは、昭和四十七年十二月のいまの執筆時まで、この青銅社刊の「詩を生活へ」こそが、ほんものと同じであると信じていた。ところが、それが『綴方生活』に所載されたほんものと同じではない、ということがわかったのである。同文の再録だとのみ誤認していたのである。こういうことに気づかしてもらったのは、同じく昭和四十七年十二月六日の日付のある弥吉宛の稲村謙一氏からの書簡によってであった。

いま、少しく、この気づきまでのいきさつについて述べておく。

わたくしは、かねてから、稲村氏の『生活への児童詩教育』を本格的に分析もし検討もすべきであると思っていた。が、原本を持っていない私は、稲村氏であれば、現時点においては、その自著を何らかの方法で入手されておられるにちがいない。その原本を一目でもいい、見せてもらいたい。もとより『詩の手帳』に再録されているのを読み直してはみたが、どうも感じが乗らないので、せめて原本のコピーでもとお願したのである。そのとき、『綴方生活』誌をも、もしも、お持ちであればとお願いをしてみたのである。

小包がきた。一は『生活への児童詩教育』であった。他は『綴方生活』誌の二月号であった。とくに『綴方生活』の目次をみて驚いた。『詩を生活へ』という題があり、下に稲村謙一とあったからである。よんでみると、『児童生活詩の理論と実践』所収の「詩を生活へ」とは異っているのである。だから私は次のように思った。稲

村氏は一月号に「詩を生活へ」の理論ともいふべきものをかき、二月号にその実践への具体化を発表したものであらうと判断した。そして、この二月号の「詩を生活へ」という論文については、日本のどなたも、まだ論及されていない。だから発表にあたいする新資料であると、ひとりよろこんだ。

ところが、二日はどたつて、稲村氏の書簡（昭和四十七年十二月六日）がきた。その書簡のなかの次の箇所は私の胸をときめかした。

〔略〕『生活詩の理論と実践』のなかの「詩を生活へ」は、この本ができるとき、もとの原稿が無ければ、新しく書いて送れというので、新しくかいたものでした。（稲村氏の弥吉への書簡）  
（昭和四十七年十二月六日）

とあった。敗戦後、間もなくの執筆依頼であるから、しかも特高に持ち去られていることも知っている編集委員のことだから、「もとの原稿が無ければ、新しく書いて送れ」というのも当然のことであると思った。なお、在来の一月説を信じてきた私は、『綴方生活』の昭和六年一月号をみれば、そこに「もとの原稿」によって活字化された「詩を生活へ」の論文が所載されているのだと直観した。そこで、研究の立場からは、昭和六年一月号所載の提言文と戦後に新しく書かれた提言文との対比研究が要請されていると考えるにいたった。が、いま筆者の眼前にあるのは二月号である。それに同じ題（詩を生活へ）での論文が所載されているのである。だから、その時点までは、『綴方生活』誌に稲村氏が、一月号から二月号へと、二号にわたって「詩を生活へ」というテーマで執筆しているものと解した。したがって、戦後に新しくかいたものと（青銅社刊の、『綴方生活』の昭和六年一月号所載のものとの対比研究が先ず必要であると考えに至った。だが、その『綴方生活』の一月号を持

ない私は、思いあまって、鳥取の稲村氏にお電話した。

「手紙にかきましたように、青銅社のものは、『もとの原稿がなければ新しくかいて送れ』ということでしたので、思い出しかいたものです。なお、一月号ではないのです。二月号に所載されたのです。だから、その二月号がほんのものです。おみせしたのがほんのものです。どうして、あの一冊が残っていたのが不思議ですか、このたび出てきたのです。」

というようなお答えであった。そこで、わたくしの、一月号所載という誤認は解消され、ほんのものは、『綴方生活』の昭和六年二月号に所載されている、ということがあきらかにされたわけである。

### 三、提言「詩を生活へ」に関する誤認の現状

「詩を生活へ」の提言を『綴方生活』の昭和六年一月号と誤認してきたのは、はたして私だけであつたらうか。どうも一月説は、すでに定説になってしまっているのではないかと思うにつけ、いっそう、いまの内にこそ検討をしておかなければと思うようになった。検討の範囲を、一九七二（昭和四七）年に最も近い時期に出版されたものから順次に逆にさかのぼり、一九五三（昭二八）年までとした。理由は、『児童生活詩の理論と実践』（「詩を生活へ」を所収）が出版されたのが、一九五三（昭二八）年であつたからであり、その後、今日までの提言認識の現状をあきらかにするのが目的であつたからでもある。

①、一九七〇（昭四五）年に、新評論社より野口茂夫著『新しい児童詩教室』が出版されている。その第三章「日本児童詩教育の歴

史」のなかで、野口氏は、

「一九三二〇昭和六〇年、『綴方生活』の一月号で、稲村謙一は『詩を生活へ』と題して、『まず現在の子どもたちが、どんな詩をつくっているか、その詩材をながめてみよう』といつて、『赤い鳥』昭和七年二月より五月までの表を示し、『この統計表を見れば、いかに子どもたちの詩材が自然に傾いているかがわかる。じつに自然物詩材は他の詩材の数倍にあるのである。この現象はほくたちに何を教えるか』といい、『花鳥風月趣味を清算し、芸術至上主義的リアリズムは是正されなければならない』と、『赤い鳥』的風景写生詩からの袂別を提唱した。」(同書八一P)

と述べている。傍点のところをみていただきたい。「一月号」としているのである。さらに「花鳥風月趣味を清算し、芸術至上主義的リアリズムは是正されなければならない」の引用文であるが、これが青銅社刊所収の文によるものか、『綴方生活』所収の文によるものか不明。なんとすれば、「花鳥風月趣味を清算し」は青銅社刊所収文にはあるが、『綴方生活』所収文にはない。ところがその下の「芸術至上主義的リアリズムは是正されなければならない」は前者と逆で、青銅社刊所収文にはなくて、『綴方生活』所収文にあるのである。よって、この引用文は何を出典とすべきか不明(同文が後述の寒川道夫の引用文にもある)だが、「この統計表を見れば……この現象はほくたちに何を教えるか」の長い引用文は、まごうかたなく青銅書刊所収文によるものである。よって、一部不明の箇所はあるとしても、全体的にみて青銅書刊の文によるものとみてよく、あわせて「一月号説」の立場をとられていることも認められる。

②、一九六九(昭四四)年に、鳩の森書房から渋谷清視著『ぼんっ子どもの詩』が出版されている。そのⅡ「子どもの詩の移り変わり」のところをみると、

「全国各地のたくさんの方の若い小学校の教師たちが中心になって、児童詩とその教育のありかたを考えるようになった。その教師の一人であった鳥取の稲村謙一は『綴方生活』という雑誌の昭和六年一月号に、『詩を生活へ』という論文を発表した。そのなかで、『赤い鳥』に載っている子どもの詩は、自然の風景を写生したものが多く、花や鳥や風や月などばかりを見て、気もちよさそうにうたって、たのしんでいる。これでは老人が庭のぼんさいをいじくつたのしんでいるのと同じで、子どもたちを、つよい心をもった生活人にそだてることはできない。もっと人間や社会の生活に目をむけさせる必要がある。そして、そのなかにも、自然にまけない美しさのあることに気づかせることがだいじだ」というような意味のことを述べている。『児童生活詩』ということばは、こうして生まれ、次にあがるような作品が、全国各地の教室からあらわれるようになった。」

(一〇四P)  
傍点筆者

と述べたうえで、ここでも傍点のところに注意していただきたい。渋谷氏は『綴方生活』の「一月号」としている。次に同氏の文は何をふまえているか。「詩を生活へ」(『綴方生活』)の中から、本文そのままを引用されているところから、青銅書刊の文をふまえているものと指摘しているところから、青銅書刊の文をふまえているものであることが実証される。なんとすれば、ほんものの「詩を生活へ」の文では、『綴方読本』の中の詩材が引用されていて、『赤い

鳥」という誌名は一回たりとも使用されていないからである。よって、青銅書刊の文によるものであるといつてよからう。いうまでもなく、渋谷氏も「一月号説」をとられているのである。

③、一九六五（昭四〇）年に、弥吉菅一著『日本の児童詩の歴史的希望』が少年写真新聞社から出版されている。その第七章「児童生活詩初期の時代」のなかで、わたくしは、

「このよらかな意図と性格をもつ『綴方生活』のなかから、ついに、すばらしい提唱がうまれた。一九三一年（昭六）のことだった。その一月号に、稲村謙一による『詩を生活へ』の絶叫的エッセイが所収されたのは。かれは、その中で、白秋の風景写生詩と訣別しなければならぬことを強調し、『詩を生活へ！だ』と叫んだ云々」（『少年写真新聞社』（昭和四〇年・一〇七P））

と述べている。前に考察しているので略記する。傍点の箇所でわかるように、「一月号説」をとり、引用文は青銅書刊所収文に従ったものである。

④、一九五三（昭二八）年に、青銅社から、『児童生活詩の理論と実践』が出版されている。その第一部に「児童生活詩小史」が寒川道夫氏によってかかれていた。その中で、

「それより早く、一九三一年一月の『綴方生活』には、稲村謙一が『詩を生活へ』の題で、風景写生詩からの訣別を、『花鳥風月趣味を清算し、芸術至上主義的リアリズムは是正されなければならない』と提唱している。これは翌々年『生活への児童詩教育』（厚生閣）という著書にまとまる最初の論稿である。（傍点）（筆者）」

と述べているが、寒川氏だって傍点のところのように「一九三一年

一月の『綴方生活』には」としていることは注目してよい。が、次の引用文（傍点）の「花鳥風月趣味……是正されねばならない」は、いずれの提言文によったのか、野口茂夫氏の場合に述べたように、あきらかでない。が、「児童生活詩小史」は「児童生活詩の理論と実践」編集のおり特別に書きおろされたものである。だから、青銅社刊の所収文「詩を生活へ」によったものかと推論される。それはともかくとして、寒川氏さえ「一月号説」をとられている。

以上、この「詩を生活へ」について、①②③④の諸氏の考えを述べてきたが、共通していることは、まず第一に、「一月号説」とっているということ。次には、その引用文が青銅書刊の提言文によっているということ。以上の二つの共通点があげられる。が、この共通した認識というものは、実は、あまりにも有名な提言「詩を生活へ」の文に対する誤認ともいうべきものである。いったい、なぜ、このような誤認が、わたくしを含めて諸氏によってなされてきたのか。結論は簡単である。第一の要因は、それを所収する『綴方生活』の昭和六年二月号なるものが、戦時中、特高によって持ち去られてしまったということにあらう。第二の要因としては、児童詩教育なるものが、未だ学的対象になつていなかったものだから、原典やその他の資料にあたって厳しく検討した上で述べるということよりも、回想的に随筆的にかかれていた、ということもあげられるであらう。

ところが、ここに一つ、あつと思わせる資料が出てきたのである。というのは、「一月号説」でなく「二月号説」採用の資料が出現したということである。それは、『生活綴方事典』（『明治図書』（昭和三年刊））の中に「児童生活詩」という項目があるが、その解説である。それには、

「児童生活詩は一九三〇年ごろ、その動きを見せていたが、一九三一（昭和六）年 雑誌『綴方生活』二月号の「詩を生活へ」（稲村謙一）の論文などをはじめとして、ようやくさかんに論じられ、一九三三（昭和八）年一月、稲村謙一の『生活への児童詩教育』が出版されるにいたり、いよいよさかんになってきた。そして実践家のあいだにその理論と実践がひろめられ、また高められていった。云々」（生活綴方事典 五七〇ページ）

とあった。「一月号」ではなく「二月号」とかかれていますのである。執筆者はとさがしてみたら稲村謙一氏であった。本人自身によって『綴方生活』二月号」と述べられているのであるから信じてよく、もはや動くものではない。それが、こともあろうに一九五八（昭三三）年刊の『生活綴方事典』に明記されているのである。であるのにそれに気づかず、詩史執筆者が在来のもゝの「一月説」を踏襲してきた十五年間の怠慢さは、いかに原典にあたらず常識でかいてきたかを、さらには有名人のコトバを信じてそのまゝに引用していたかということを実に物語るものといえよう。もとより生活綴方事件という不幸な要因が厳存していたとはいえ、わたくしども自らの学的姿勢がまず問い正さるべきものである。ここに強く反省と自戒ををなし、気づかずして犯していたこの大きなミスを世の方々に対し、深くお詫し誤認を訂正するものである。

#### 四、本物の「詩を生活へ」の本文

現在のところ、稲村氏の提言「詩を生活へ」の文は二種類あることになる。一は、一九三一（昭和六）年『綴方生活』誌の二月号に所載

されたもの。二は、それから二十二年を経た一九五三（昭二八）刊『児童生活詩の理論と実践』に所収された（もとの原稿がなかったので新しく書いた）ものである。二つとも現在は入手し難い雑誌であり書物であるが、後者は時たま古本にて出現の可能性があると、前者『綴方生活』は至難の極にあるといえよう。したがって、ここにその『綴方生活』昭和六年二月号所収の「詩を生活へ」の全部を掲げることにする。

### 詩を生活へ

稲村 謙一

#### 1、現代を見る

毎月の諸雑誌を見ると、じつに多くの児童詩が発表せられつつある。曾ての童謡のそののやうな盛観には未だ至らないが、まことに華々しく盛なことだ。全国小学校に今や新興の爽かさをもって浸潤しつつあることを想望すれば、躍らざるを得ないではないか。

さて、その児童詩の現状は。

僕は試みに、「綴方読本」十月号五年生を開いてその詩材を見よう。

自然 桐のめ・日光・きく・橋の朝・ふろの中の月・朝・赤とんぼ  
生活 死んだ母・かへる・雨の日

僕は かへる・雨の日 共にどちらかと云へば風景詩だと思ふのだが。

尙数ヶ月の統計的数字を見れば一層はつきりするが略するとして、ここに見出されるものは全く絶対多数を占める風景写生詩である。そこにあるものは、草と、木と、風と、鳥と、虫と、山と、馬と、野と、湖と等々である。

花鳥風月趣味。まったく花鳥風月趣味なのだ。子供たちは自然にのみ目を注ぎ、自然素材の蒐集を、あるひは統合を堆積を、意図してゐるのである。  
時たまに自己、あるひは人間が挿入される。けれどもそれらは皆風景の一添材として、風景の片隅に存在し、風景を構成する一素材にしかすぎない。  
例へば 前出の「綴方読本」の（かへる）（雨の日）である。

かへる

尋五 河 静 寛

かへるがないてた  
みぞのそばでないてた  
私も寒さうにふるへてた

雨の日

尋五 石 井 豊

がらすの向ふに松の木がゆれてゐて  
雨がさあざあふつてゐる  
教室の中の僕達は  
ざわざわさいである  
ふつかけ雨は家の中へはいらうとしてゐるが  
がらすに打当るばかりではいれない  
先生が行くとしんとして  
先生が行くとまたさわく僕たち五年生  
雨はなか／＼やみさうもない

作者の第一関心は風景である。その中に人間が動いてゐるのである。ここには生活への積極的な認識がない。

## 2、詩を生活へ

僕は今までに、  
現状児童作者たちがあるひは児童詩指導者たちが、如何に甚大なる関心を自然に對して払ひつゝあるかを見て来た。

僕たちは果してこのまゝ押し進めていつていいか。

僕たちは明らかに想見する。この芸術至上主義的リアリズムは正されなければならないと。

さうだ。このブルジョア的、宗匠的、隱遁的、非生活的な態度は排撃されなければならない。（僕も勿論写生詩に對して百パーセントの排撃をおくるものではないが——なほ写生詩についてはいろいろ論すべきことも多いと思ふが）

僕たちの児童詩は、老後の慰みに、それを手すさびとする隱居芸術的な児童詩であつたり、詩作者であつてはならないのだ。

自然への没入をひたすらに志し、自然のよわわしい觀照や、憧憬、陶醉にのみ没入して、自己を忘れ、社会を忘れ、生活を忘れ、まこと芸術至上主義的な歩みを歩んでゐる子供たちに對して、僕たちは今真剣に忠告しなければならぬではないか。

それは何であるか  
詩を生活へである

生活の中に詩を見出し、詩を生活の中に生むのだ。

芸術至上主義的リアリズム、ブルジョア的リアリズムを捨ててゐるのだ。

生活への肉迫だ。生活への力強い働きかけだ。生活の積極



的認識だ。構成だ。批判だ。

兄

尋五

安藤 尙市

明日

農学校に居る兄がかへる

家中のものが

兄のことはかり話してゐる

ます子の死

尋五

上田 一郎

ます子に死に別れて

心はまぎしい

ます子の死んだ時

ます子はねてゐるやうだつた

ます子の死んだことを思ふと

涙が出てたまらない

かみなり

尋二

中川 幸宗

かみなりがごろりとなつた

さちいたんが

口にはいつたといつてなき出した

○

尋六

花房 立身

ねころんで天井見ると

ふるさとの家に

かへつたやうな気になる

これは概念的であつたり、センチメンタルであつたりして、まだ僕の意には満たないが、生活への認識はうなづかれる。

いつたいに子供たちは充分生活への認識はもつてゐるはずだ。綴方における子供たちを見るがいい。

児童詩を生活へ——僕たちは、ここにほのぼのとした  
黎明の颯爽さを感じないか。

以上が全文である。「綴方生活」昭和六年二月号所収のもの。六四Pから六八Pにわたる四Pと五行の論文である。

これを所載する「綴方生活」は九四Pの中味を持つ雑誌で、表紙には「綴方生活」と横書。その下部の中央に「2月」とある。なお、表紙の中ほどの左がわに「文集研究号」とある。目次のところを開くと、最初の一行に「綴方生活 第三巻二月号」とあり、最後に、表紙は竹久夢二、カットは立野道正とある。巻末の刊記は三段に組まれているが、その中の中段と下段を略記すると、

昭和六年一月廿五日

印刷納本

昭和六年二月一日発行(月一回一日)

東京市神田区錦町 一ノ二

編輯人

小砂丘忠義

発行人

一ノ二

発行所

郷土社

とある。

## 五、提言「詩を生活へ」の分析と意義

以上のような提言本文を公的に掲げる前に、わたくしは、ひとかたならず躊躇した。というのは、現存する二つの提言を対比してみると、やっぱり、あとから当時(二十二年も前のこと)のことを思い出し

て書かせられた青銅社刊本（一九五三）所収提言文の方が構成といひ内容といひ充実していると考えられたからである。しかも、世間では、それが本物の「詩を生活へ」の提言文だと信じこまれているのである。であるのに、それより二十二年も前に書かれたものを、いまになって、これが本物だと公表しようとするのであるから、酷な気がしてならなかった。しかし、その躊躇は次の文に出合いを持ち得たことによつて解消した。その文とは、先きに掲げた「児童生活詩の理論と実践」（青銅社刊）の「まえがき」に、

「いまの青年教師のみなさんが、このような評論が、二十幾歳のわかい教師たちによつてかかれたものであることに思いをはせて、今日においては、われわれこそ、生活綴方や生活詩のもっと前進した理論を創造しなければならないのだとの気持ちを、おもちになつていただきたいということです。今日になつてみれば、執筆者のだれもが、はずかしくてたまらないような点もあるにちがいないこの評論集を、わたしたちが公刊しようとするのも、このねがいがあつてのことであります。」（傍点）  
とあつたからである。このように、「二十幾歳のわかい教師によつてかかれたものであることに思いをはせて」、この提言を見直してみると、やっぱり、わかきのメリットがにじみ出ている。そのわかきでここまでの提言がと、なまの文を未来の青年教師にブツケルように準備してあげることこそが、わたくしたちの仕事ではないか、と考え直したからである。

さて、その本物の「詩を生活へ」の提言はどのようなメリットを持ち、その当時の青年教師を動かし未来に向つて叫びかけていたの

か。①題目の示す価値、②現状分析の価値、③方向指示の価値、以上の三点からそのメリットにせまってみたい。論述の手法としては、主観的になるおそれが多分にあるが、筆者であるわたくし自身の当時における児童詩教育実践との対比を敢えて採用してみる。

①題目の示す価値——「詩を生活へ」という題目は、その目標とするところを、きわめて的確に示したものである。他の方向には、わきめもふらず突進せよといった若さのいぶきを直感させる。その時代の前衛誌としての『北方教育』などにも、ざつと目を通してみたが、児童詩教育に関して、このようなダイタンな提言は、管見のいたすところ、見出すことはできなかった。なお、当時のわたくしは九州の柳川の近くで白秋の児童自由詩に熱中していたので「生活へ」といったスローガンには気づくはずがなかった。

②現状分析の価値——本論文は大きく二分されている。まず、1を「現状を見る」の小見出しとし、2を「詩を生活へ」の小見出しとしている。まず「現代を見る」の項について考える。

ここでは、毎号の雑誌に、児童詩が発表され、かつての童謡時代のそれほどではないにしても、盛んになってきたことをよろこび、『綴方読本』のなかの詩材分析にはいつている。その詩材の「数ヶ月の統計的数字を見れば一層はつきりするが」と前置きをし、

「ここに見出されるものは全く絶対多数を占める風景写生詩である。そこにあるものは、草と、木と、風と、鳥と、虫と、山と、馬と、野と、湖と等々である。」

花鳥風月趣味。まったく花鳥風月趣味なのだ。」

と、詩材の傾向が、花鳥風月でしかないことを、はき出すように指摘し、これでいいのかと読者にせまっている。

次に、その詩材の中に人間があることを指摘し批判に及んでいるが、注目にあたいる。

「時たまに自己、あるいは人間が挿入される。けれどもそれらは、皆、風景の一添材として、風景の片隅に存在し、風景を構成する一素材にしかすぎない。」

と指摘する。この指摘は、すごく鋭いと判じてよからう。実践的苦悩を持った人にして初めていえるコトバである。筆者も、そのころ小学校の教壇にたち児童詩教育に熱中していたが、今からみれば、たしかに花鳥風月の詩をつくらせていたことになる。感覚詩であり写生詩であった。「時たまに自己、あるいは、人間が挿入される」ことが確かにあった。しかし、それは「風景を構成する一素材にしかすぎない」ものであった。だから、わたくしの指導した詩文集を中央に送っても、もとより一回も所載されたことがなく、「人間らしい人間がない」とか、「生活がない」とかの批判がはねかえってきていた。そのころ、わたくしには、十二分に、そのことがわからなかった。いまこの稲村氏の論文をよみ、当時のことを想起するにつけ、鳥取の田舎におられて、よくもここまで革新的で画期的な発言ができたのだと驚かざるを得ない。

さらに感心させられることは、「かへる」とか「雨の日」とかの詩をとり出している批判である。「作者の第一関心は風景である。その中に、人間が動いているのである」という単評の鋭さをたたえた。実践経験者にして初めていえることで、白秋の児童自由詩に陶醉していた、わたくしのようなものには、とても、できない単評である。芸術至上主義リアリズムにおぼれてしまっていたので、なんらの批判もできない田舎教師であったことを今にして知らされる。

③方向指示の価値——2の「詩を生活へ」の分析にはいる。彼は「僕たちは今までに、現代児童詩作者たちが、あるいは児童詩指導者たちが、如何に甚大な関心を自然に払ひつつあるかを見て来た」と述べ、「僕たちは果してこのまゝ押し進めていつていいか。」とつめよる。このたたみかけのつめよりは、自然現象の写生詩にうつつをぬかし田舎テングになっていた当時の私は、胸に短刀をつきつけられた思いをしたことであらう。もしも、その当時、この「綴方生活」を手にしていたら……。このようなつめよりを前提にして、かれ稲村は「このまま」を、次のようなコトバで否定する。

「僕たちは明らかに想見する。この芸術至上主義的リアリズムは是正されなければならないと。」

さうだ。このブルジョア的、宗匠的、隠遁的、悲生活的な態度は排撃されなければならない。云々」

と、そのすさまじいいきおいは、自問自答の文章形態をとらせ、はげしいコトバで否定しつづける。そして「今真剣に忠告しなければならぬ」ことを、彼は叫ぶ。

「詩を生活へである。」

生活の中に詩を見出し、詩を生活の中に生むのだ。芸術至上主義的リアリズム、ブルジョア的リアリズムを捨てろのだ。

生活への肉迫だ。生活への力強い働きかけだ。生活の積極的認識だ。構成だ。批判だ。」

と、そのはげしい息づかいは、読者に肉迫し、読者を圧倒する。

「詩を生活へである」をゴチックにしている所を見落してはならぬ。すべての文末が「生むのだ」「捨てろのだ」「肉迫だ」「働きかけだ」「認識だ」「批判だ」となっていることにも注意していただ

きたい。かれが児童詩変革に、いかに至烈な意欲を持っていたかを  
つかむために……。

この次に、彼は「兄」「ます子の死」「かみなり」「〇」の四つ  
の詩を例示し、生活がとり入れられているようだが、なお、「概念的  
であつたり、センチメンタルであつたり」している。不満ではある  
が「生活への認識はうなづける」とし、最後に再び「児童詩は生  
活へ」だとゴチックで方向を強調し、このエッセイを結んでいる。

以上、①②③の三点からそのメリットを検討してきたのであるが、  
この「詩を生活へ」のエッセイは、どちらかというと、絶叫的な  
詩的形態をとっているといえよう。だが、彼がいたいことだけは、  
波頭を飛びこすようないきこみで、スバリと叫んでいる。そこ  
に、わかさが持つ南国的な情炎の噴出がある。これが当時の青年教  
師を引きつけたものであろう。これを、さらにあため、その理論  
と実践を多角的に追求深化し体系化したものが二年後に出版された  
『生活への児童詩教育』である。この著についての考察は次回に譲  
ることとし、本論の結びを急ぐことにする。

さて、稲村謙一氏の「詩を生活へ」のエッセイは、実践を通して  
の現状分析に出発し、そこからわいてきた児童詩の未来像を生活詩  
へと絶叫されたものである。これに対して、さがわみちお氏は「児  
童生活詩小史」で、次のように位置づけしている。

「稲村謙一の生活詩理論は、この雑誌を通してさらに一般化さ  
れた。これは同時に花鳥風詠に現実遊離をかこっていた教員大  
衆の渴望していたものでもあったからである。」（『児童生活詩の理  
論と実践』に所収  
「児童生活詩小史」  
「五」一六ページ）

とあるが、妥当な位置づけであると認められる。なんとすれば、白  
秋の児童自由詩に熱中していた私が次第に次のことに気づくようにな  
ったからである。第一は、感覚の鋭さを要求しすぎたので鋭さは  
ました、病的なものが出現するようになったこと。第二には、詩  
材の対象が自然（花鳥風月）に限定されるようになり、人間の生活  
が除外されていったということ。第三には、即リアルからくる客観  
性の重視から花鳥風月を静観し楽しむ人間像となり、生活を逃避  
し、消極的な傍観的な青白き文学少年少女を生むにいたったこと。  
これらは人類の生活がもつ歴史を停止させる方向にあると認められ  
るにいたったからである。この学校で、もつとも敏感な鋭い感覚を  
持っているのは私の学級の子であると自認していたら、某女教師が  
「あなたの組の子はボーっとしている」と批判した。児童自由詩  
（感覚詩・写生詩）に対する私の行き詰りは、ここからはじまっ  
た。稲村謙一氏は、世に先んじてそれを感じ打開の方向を「詩を生  
活へ」と提言したのである。それは、実践行の中でのすばらしい発  
見である。

#### 補記

本稿を草するにあたり、稲村謙一氏より、『綴方生活』  
（昭和六年二月号）と御著『生活への児童詩教育』を拝  
借することができた。なお、弥吉宛の書簡公開のおゆる  
しをも得た。ここに、深くお礼を申しあげる。

#### 注①

「これらの原稿の載った雑誌はみんな持っていました  
が、生活綴方事件のとき、特高が持ち帰ったことと、こ  
れらの文章をひとまとめにして 時の主席與視学に出

しましたので、今は手許にありません。」(昭和四十七年十二月六日、弥吉菅一宛の稲村謙一氏の書簡)

注②

『綴方生活』は一九二九(昭和四)年、小砂丘忠義によって創刊。生活重視の月刊教育誌。同人組織。はじめの同人は野村芳兵衛・峰地光雄・上田庄三郎・千葉春雄らであった。のち、野口茂夫・今井誉次郎・村山俊太郎ら参加。昭和十年に一分派が「生活学校」を出版。その後官憲の弾圧と経済困難のため、次第にはそり、一九三七(昭和十二)年に小砂丘忠義氏の病死と共に終刊。『詩の手帳』(一九六二年四月号より十一月まで)に稲村謙一氏の「生活への児童詩教育」を全部再録。

注③

注④

注①に同じ。注①のつづきを少し加えておく。「今は手許にありません。ところが、どうしてだか、ひよっと「詩を生活へ」ののった『綴方生活』が出てきました。どうしてこれが残っていたのか、分かりません。多分『鑑賞文選』なんかの中に交っていて、特高も持って帰らなかったのでしょうか。」(注①と同じ書簡)

注⑤

「非生活的な態度は排撃されなければならない。(僕も勿論写生詩に対して百パーセントの排撃をおくるものではないが——なお写生詩についてはいろいろ論すべきことも多いと思ふが)」というように(一)づけの付言がある。ここに稲村氏の児童詩が北方グループの方々のそれ

注⑥

と異質性を持つようになる芽が認められる。

小砂丘忠義編の『綴方生活』そのものが今日では奇観に属する雑誌である。その上これは、その第三巻第二号で、稲村謙一氏の「詩を生活へ」のエッセイを所載する昭和六年の二月号である。日本児童詩教育史上、欠くことのできない重要な資料文献である。それであるのに、「生活綴方事件」のため持ち去られ、入手することも見ることも至難の極におかれてきた。ところが、不思議なことに、稲村氏のご好意で調覧の機会を与えられた。このよろこびをみんなのものにもと思って、その表紙・目次・本文・刊記などを写真にとり、本論に掲載するつもりであった。だが、事情あって中止した。表紙における夢二の絵にもすばらしさがあり、目次にいたっては、謙村氏の「詩を生活へ」はもとより、当時に活躍しておられた方々の氏名なども一目でわかる。だから所載したかったのである。が、中止し一部の略記にとどめ、本文のみを複製した。

注⑦

「この雑誌」とは『教育・国語教育』(一九三一・八昭六〇年四月創刊・千葉春雄編)をいう。全国の若い教師をばげまし、活躍の場をあたえた。一九四三(昭十八)年、千葉春雄氏の歿するまで続刊。

(昭和四十七年十二月)